

23 「中国・四国・九州地区生涯教育実践研究交流会」の偉業に思う?!

堂本 彰夫

(1) そもそも何が「偉業」なのか?その継続と広がり、本当に驚異的、否、神懸かり的でさえある?!

過日(4/15)、所属する日本生涯教育学会から(まだ会員自体は続けている!）、標記「交流会」の、今年度の開催(5/18~19)案内が届いた!何と、今回は、「第41回大会」とある!同「交流会」の「主催」は福岡県教育委員会と日本生涯教育学会九州支部、「主管」が中国・四国・九州地区生涯教育実践研究交流会第41回実行委員会と福岡県立社会教育総合センターとあるが、その関係からも分かるように、事実上は、その「実行委員会」(当該各県から、少なくとも1人以上の実行委員が出ている!実は、私も、20年以上、その一人であった!)と「社会教育総合センター」が協働して、その事務、そして運営を行っているわけである(ただし、最終的な、そして、ほとんどの事務・運操作業は、同センターが担っていることは言うまでもない!)。とは言え、一応は民間主導形式の同会ではあるので(福岡県の実行委員が中心となっている!そこには、それなりの経緯と歴史がある!)、その「継続と広がり」は、本当に驚異的、否、神懸かり的でさえある?!

しかるに、今回の大会は、副題にもあるが、「M先生追悼大会」(ここでは、敢えて「M先生」という表記をさせてもらった!昨年11月に逝去された!)ということである!本「教育協働への道」においても、その「M先生」のことは、幾度か語らせたもらったが、とにかく、「凄惨な先生」であった!私と同じような経歴の持ち主で(スタートが行政職からであったということであるが!尤も、それにしても、私が、独り勝手に、そのように受け止めているだけかもしれないが?)、大学における研究者としても、教育者としても、そして、何よりも、様々な「挑戦者・開拓者?」としても、まさに崇敬に値する人物、そして先輩(直接的には、現在の「国立教育政策研究所社会教育実践研究センター<当時は「国立社会教育研修所」>、通称「国社研」のそれ)でもあった!私は、密かに、そのM先生のことを、いつしか「疾駆さきゆく人」とも呼んで(書いて)いた!そして、この「交流会」は、まさに、そのM先生(達)が立ち上げたものなのである!

とは言え、詳しいことは、これ以上ここでは書けないが、ここで強調しておきたいことは、もちろんそのM先生がいなかったら、ここまでの会にはならなかったとは断言出来るが、もう一つの要因として、彼を信じ、支える人達が傍にいたということである!その代表的存在が、「Mさん」(同じイニシャルであるが、ここでも、こう表記させてもらおう!)であるが、この人がいなかったら、ひょっとしたら、この「交流会」は、別の運命を辿っていたかもしれない(これも、私には断言出来る!本人は、否定されるであろうが!)?!余計なことであるが、先般、かなりの躊躇もあったが、そのMさんに電話させてもらった!一つの、そして大きな節目である今回の開催に当たって、やはり何か伝えたい(否、伝えなければいけない!)という思いでのそれであったが、直接顔を合わせての会話ではなかったため、その表情とか、心の奥底にある思い等は分からなかった!かなりお年は召されているが(私より、10才以上年上であるはず!)、声のトーンや話し振りは、当時と同じようにも思われた!本当に、頭の下がる思いであった!

ちなみに、ここで、敢えて書き加えておきたいことは、彼が、途中で何気なく語った(しかも、寂しそうな声で!)、「途中で止めたと言える人は、羨ましい!」というセリフについてである!それには、本当に複雑な思いも過ったが(彼に言わせれば、私(達)は、まさにそういうことであったということであろう!実は、私と同じような想いとスタンスの持ち主もいたのであるが、彼は、それも含めて、そう言ったのである?)、私にも、本当は言いたいことがあったが(ただし、反論では決してない!)、それはそれで、重く聞き及んだということである!さらに言えば、彼(だけ?)には、そのセリフを言うだけの資格があるということでもある!少なくとも、私は、そう思っている!だから、それについては、何も言えない(言っただけではいけない?)のである!

(2) ためになったこと!楽しかったこと!思い出すことは、数限りなくある!

さて、そんなこんなで、振り返れば、数限りない思い出がそこにはあるのであるが(もちろんためになったこと、楽しかったことも含めて!)、ここで私が改めて主張しておきたいことは、私は、全てを止めたわけではない!そちらに行く(関わる)ことを止めただけなのであるということである!Mさんに、この物言いの真意を分かって欲しいとは思わないが、私の依って立つ場所は、実はそこではないということである!重要な場ではあったが、最後まで、自分の身(心)を、そこに置かなければならないわけではないということである(ある時期は、そう思っていたのかもしれないが!)!いずれにしても、時は流れてしまった(悔しい思いを封印させたまま?)!

まあそれはともかく、今回のプログラムで、私にとって、改めて注目されるのは、二日目の「特別企画」(Mが問い続けた『未来の必要』~その教育思想と実践~)、とりわけ第1部「各地生涯教育実践研究交流会の展

開と意義～大会はなぜ広がったのか、何をもたらしたのか～」である！その登壇者（事例発表者）には、茨城県の「関東近県生涯学習・社会教育実践研究交流会」、愛媛県の「地域教育実践交流集会」、長崎県の「社会教育支援『草社の会』」、宮崎県の「生涯学習実践研究交流会」の、それぞれの関係者（中心人物？）が、名前を連ねているのである！聞くとところによると、それらは、すべて、この「交流会」に参加した人（達）が、いわゆる「地元」に帰って立ち上げたものであるそうである！私自身も、一応は、それらしきものを立ち上げ、あれこれ意を尽くしてはきたが、残念ながら、今回のような取り組みとはなっていない！改めて悔しいし、羨ましい限りである！他にも、そのような組織や会が、あちこちで見られていたが、今は、どうなっているのであろうか？とにかく、そのことは、偉業としか言いようがない！

ということで、事程左様に、この「交流会」は、実に多くの、そして遠隔地からの発表者・参加者があり（原則手弁当であるが！）、そこでの事例発表や情報交流は、私の知る限りではあるが、他の追随を許さないものであった！まさに、「類が類を呼ぶ！」、その一言であったということである！ある時期、私は、そのような光景を、是非私の学生達にも見せたいということで、彼らを引き連れていったことがあるが（実際は、私が、引き連られていった？笑）、おそらく彼らにとっては、まさに衝撃的な光景であったろう（前後の旅行？も含めて！）！もちろん、そうした光景は、毎年私から誑かされて参加した人（達）も同じであったろう？！「人々の熱き思い」と「何か、そこから生まれる？という期待（希望）」が、そこには充満していたということである？！適度な月日と適度な距離（頻繁には会えない）が、そうさせたのかもしれない（年一回の再会の場という、言わば「祭り」的な要素もあったということである？）？！もちろん今も、そうした雰囲気や状況の中で、人々の熱き出会いの場となっていることであらう（かなり様相は変わってきているらしいが？）？！

(3) しかし、だからこそ？、私としては、ある意味残念でもあり、悔しくもあったのである？！

だが、思えば、そうした交流会である（った）が故に、私としては、ある意味残念でもあり、悔しくもあったのである？！それは、本交流会と、その主催主体としている生涯教育学会九州支部との関係についてである（実は、これが、私の離脱？、不参加の直接的な理由とも言える！）！最早、関係者の顔ぶれも大幅に変わり（世代交代？）、当時の私の思いや言動を振り返ったところで、誰も歓迎しないだろうし、興味も湧かないであろうが、私の、最初で最後のけじめとして（ある意味、M先生への手向けの言葉として？）、語っておきたいということである！その意味では、否、本当は、こちらの方が書き残して置きたいこととも言えるのかもかもしれない（ただし、単なる恨み節でないことは、分かる人には分かって欲しいが…否、それは難しいかな？）？！

と言うのも、実は、何故、「九州支部」と名乗っていたか（学会からの助成金が得られる？）？その関係を、もう少し実りのあるものにしようと、言い換えれば、当学会大会自体にその成果を取り入れたいと、私は、当初から思っていたのであるが（当学会の九州地区理事になったこともあり！）、「支部」と名乗っていた人達（言わば「M先生グループ」？）と学会本部（主要理事）共に、それ以上の歩み寄りにはなかった（おそらく学会内部の人間関係がそうさせた？）？！このことについては、これ以上のことは書けないが（憶測も入るかもしれないので？）、私は、純粹に、ここでの成果が、そしてその関係が、学会全体の成果と、その存在意義の拡大に繋がって欲しいと思ったわけであるし、それが、我が国の「生涯教育（学習）」の発展に繋がると考えたからである（全国の学会関係者、とりわけ大学の研究者達に、そのことを告げなかったわけである！）！

しかし、一方で、彼らには、支部とは名乗っているが、学会の下部組織ではないという自負があったものと思われる？！実態（実体？）からすれば、それは、ある意味事実でもあり、とりわけ「実践」をアピールする当交流会にあっては、その自負も、その成果（実力？）からすれば、まさに正当であったとも言えるであろう！もちろん、厳密に言えば、ここでの「実践」というものが、いわゆる「学会」というものの「実践研究」とどう違うのか？また、それが、学会における「理論研究」とどのように関連してくるのか？多少、研究者の端くれであった私からすれば、忸怩たるものを禁じ得ないのであるが（今となっては、これも、ほとんど無用ではあるが？）、ある意味「現実がすべてではある」ので、それはそれでよしとしなければいけない？！

一番の悔いは、私自身は、終始「生涯教育」というスタンス（看板）が重要であると主張してきたが、同交流会は、当時のご多分に漏れず、ある時期までは「生涯学習」というスタンス（看板）で賑わっていた！ただし、途中から、どういう訳か？、「生涯教育」という名称（看板）が変わったが（私自身は、そのことに関与はしていない！だから、悔しくもある？）、その意義や実践研究の中身が変わったのかどうか？なかなか難しいところであるが（ほとんど変わっていない？範囲が拡散しただけ？しかも、他ならぬ、一方の「学会」自体が、その理論的説明を行いきれていない！）、それがまた、その担い手の中心であった「社会教育（行政）」の凋落を招いたことだけははっきりしている？！そう、言うなれば、それは、人々の「生涯学習」の推進、発展をめざすものではあったが、一方では、他ならぬ「教育」のあり方・システムを変えるものでもあったのである！だから、その用語の転換には、単なる置き換えではないものがあったのである！（つづく）